

「あかん!あかん!あかん!!!」

小都華達の目の前に広がっていたのは津波であった。

オロチモンが降らせた雨が溢れかえっていき田園を覆い尽くす津波となっていた。

「逃げ…!!!」

小都華達がお互いに手を伸ばそうとする。

しかし、津波の大きさから距離感を誤り、行動しようとした瞬間には、小都華達は津波に飲み込まれてしまった。



「…さん。」

「小都…華さん。」

(ここは…。)

月彦は気付けば、異界と言えるような場所に浮かんでいた。

意識が保てず薄らとしか認識できなかったが、どこからか声が聞こえてきた。

（何かを見せようとしているのか…。）

「お母さん。」



「なんで！ お前は！ 何もできないんだ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

「だから私たちは捨てられたんだ！ お前が何もできないから！」

六畳の部屋の蛍光灯はチカチカして、影が壁で揺れていた。

台所の流しには空になった缶チューハイと洗ってない皿。 冷蔵庫を開けても、ケチャップと卵がひとつだけ。

お母さんの声と一緒に、椅子を蹴る音が響く。

僕は布団に潜り込みたいのに、逃げられない。

だから謝るしかない。僕が悪いから。僕が役立たずだから。



僕はお母さんが大好きだった。  
なんとか笑ってほしくて、叩かれても、いじめられても、がんばって勉強した。  
運動は足が悪くてダメだったけど、勉強だけは一番を目指した。  
に……しゅんさん？たちが僕のことでお母さんと話しても、僕はお母さんが好きだから離れなかった。  
テストも何回も 100 点を取った。  
最初は、お母さんも笑ってくれた。  
その笑顔は、薄暗い六畳の部屋で見た、数少ない光みたいだった。  
僕はそれを、自分が生きている意味だと思った。

「そんなのが……なんの役に立つの。」

でも、ある日からお母さんは喜ばなくなった。  
あとで知ったけど、お父さんに会っていたらしい。  
お母さんは僕を叩かなくなったけど、今度は何もしなくなった。  
台所の流しには洗っていない皿が山になって、冷蔵庫の中は空っぽだった。  
お母さんはただ泣いていた。  
部屋の空気が重くて、テレビの音だけが響いていた。  
僕は殴られるより、それがつらかった。  
お母さんが僕を見てくれないこと、そのほうがずっとつらかった。



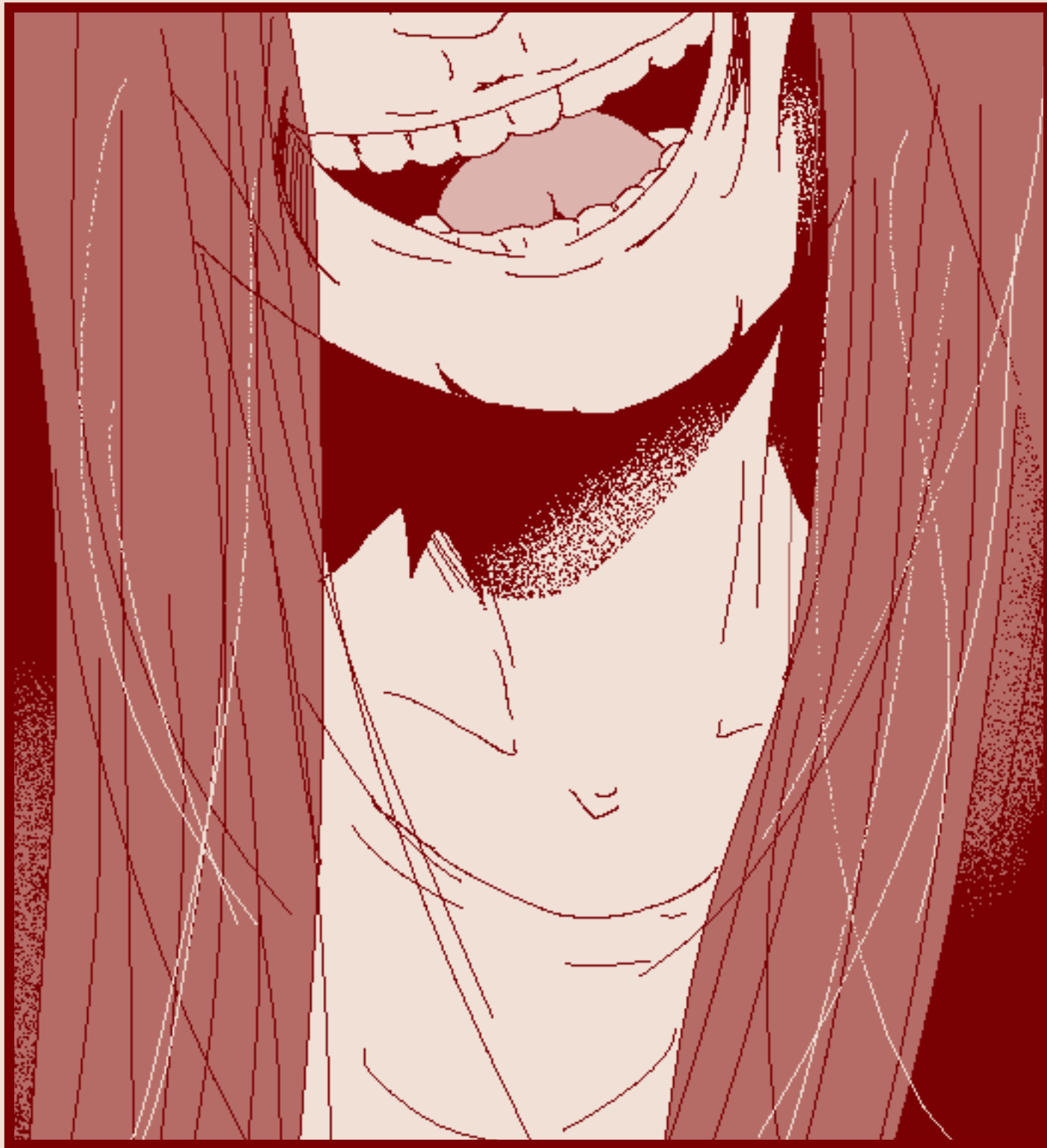


僕は、自分がどうすればいいのか分からなくなった。  
お母さんに笑ってほしくて、それだけを思ってたときは、いじめられても平気だった。  
痛いことも、冷たいことも、全部消えるみたいだった。  
でも、お母さんが何もしなくなってからは……涙が止まらなかった。  
夕日の赤い光が部屋の壁に長く伸びて、影がゆらゆらして怖かった。  
公園の土の味が口に苦く残って、擦りむいたひざがひりひりして、悲しくて、涙が止まらなかった。  
冷蔵庫のモーターの音だけがぶうんと鳴っていて、部屋の中がからっぽみたいに感じた。

僕は、なんで生きているんだろう。



しばらくして、お母さんが僕が覚えてる中で1番の笑顔をしていた。  
僕は初めてお父さんに会った。  
お父さんは僕を見下ろし、嫌そうな顔をしていた。  
お父さんが言うには、僕はこの村のためにミシャクジ様に捧げられるという事だった。  
その為にお母さんは僕を産んだということらしい。  
それを喜ばないといけないらしかった。



よく分からないけど、お母さんが喜んでるから僕も嬉しかった。  
お母さんはしっかりとお役目を果たすんだよ。と何度も言った。  
僕はそれに何度もうなづいた。  
でも、お母さんは僕じゃなくてずっとお父さんを見ていた。





社に連れて行かれて裸になって身体を縛られた。  
何かが身体を這いずり回って、何かが身体を締め上げてきた。  
痛くて、辛いけど、お母さんはそれを笑って見ていた。





僕は初めて分かった。  
これが僕の産まれた意味なんだって、これが幸せなんだって。  
だから、だから思ったんだ。  
みんなにもこの幸せを分けてあげないといけないんだって。  
そしたら、ミシャクジ様が語りかけてきた。  
その力を上げるってだからもっとみんなを僕みたいに捧げないとなんだって。  
お父さんは村を大きくする大事な仕事があるから駄目だけど他の人は、みんな皆  
んな。  
だから、僕はお母さんを…悲しかったけど死んで欲しくなかったけど、だってそれ  
が幸せなんだから。



「そんな訳あるかいな！」

「だって僕はお母さんが好きだったから。」

『あなたが頑張れば私達はまた、お父さんと一緒に。』

「僕頑張ったんだよ。」

『あんたがあのひとに認められないから！』

「ごめんなさい…ごめんなさい。」

『子になれば、御役目をしっかりと果たすんだよ。』

「ねえ…だからお母さん。」

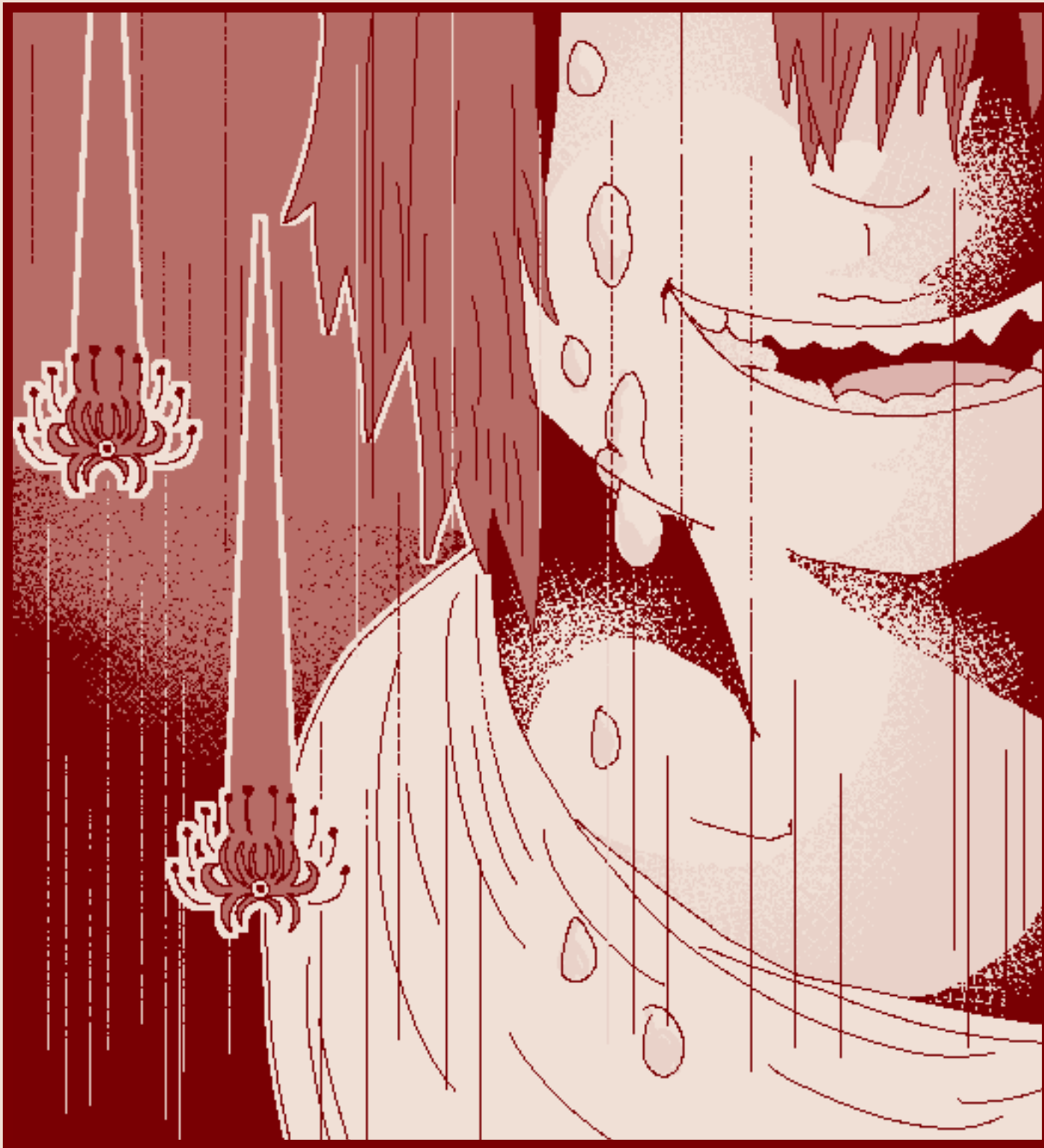
『一度でいいからあんたを産んで良かったと思わせてよ!!』

「…お母さん僕幸せだったよ。」

何を目の前にしているか、重々に分かっていた。

しかし、小都華はその少年を抱きしめずにいられなかった。

「違う…そんなの…そんなの幸せじゃなんでもあらへん…！」



「なんで、お姉ちゃんが泣いてるの？なんで、そんなこと言うの？」

じゃあ…僕はどうすれば幸せになれたの？

小都華には、この少年に、もう既に終わっている小さな命に掛ける言葉が見つからなかった。

終わってしまったものにどの言葉を投げかけようと何も変えられない。

そこに残るのは欺瞞だけであるのが分かっていた。

それでも、抱きしめる手だけは一層力を増していた。



鳴動するように案山子達の絶叫と嘆きが木霊していく。

『もっと生きたかった!』

『あの人に会わせて!!!』

『まだ俺にはやりたい事もやらなきゃいけない事も!!!』

『お母さんお父さん!!!』

『まだ眠りたくない』

『母さん…怖い怖い怖い怖い怖い。』

『友達にごめんと言いたい』

『手を…つなぎたい。』

『なんで…俺が、一体何を。』

『一度でいいから恋を…。』

『名前を…あの声でもう一度。』

『あの人に会いたい』

『好きと…。』

『約束したのに…。』

『父さんに…もう一度褒めら…。』

『ややこを抱きしめて。』

『孫の…あの子の成長を。』

『もう一度、家に帰りたい』

『灯りの下で…』

『海を見たかった。』

『星を数えたかった。』

『こんな甲斐性のないのが…人生なんて。』

『誰か…手紙を届け…。』

『声を誰か俺の声を…。』

『まだまだやりたいことが…。』

『春を…桜をもう一度。』

『あの…花を。』

『やり直せたら…素直に話して。』

『帰りたい。』

『帰りたい。』

『帰りたい。』

『生きたい、生きたい、生きたい。』

『生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、  
生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、  
生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、  
生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい。』

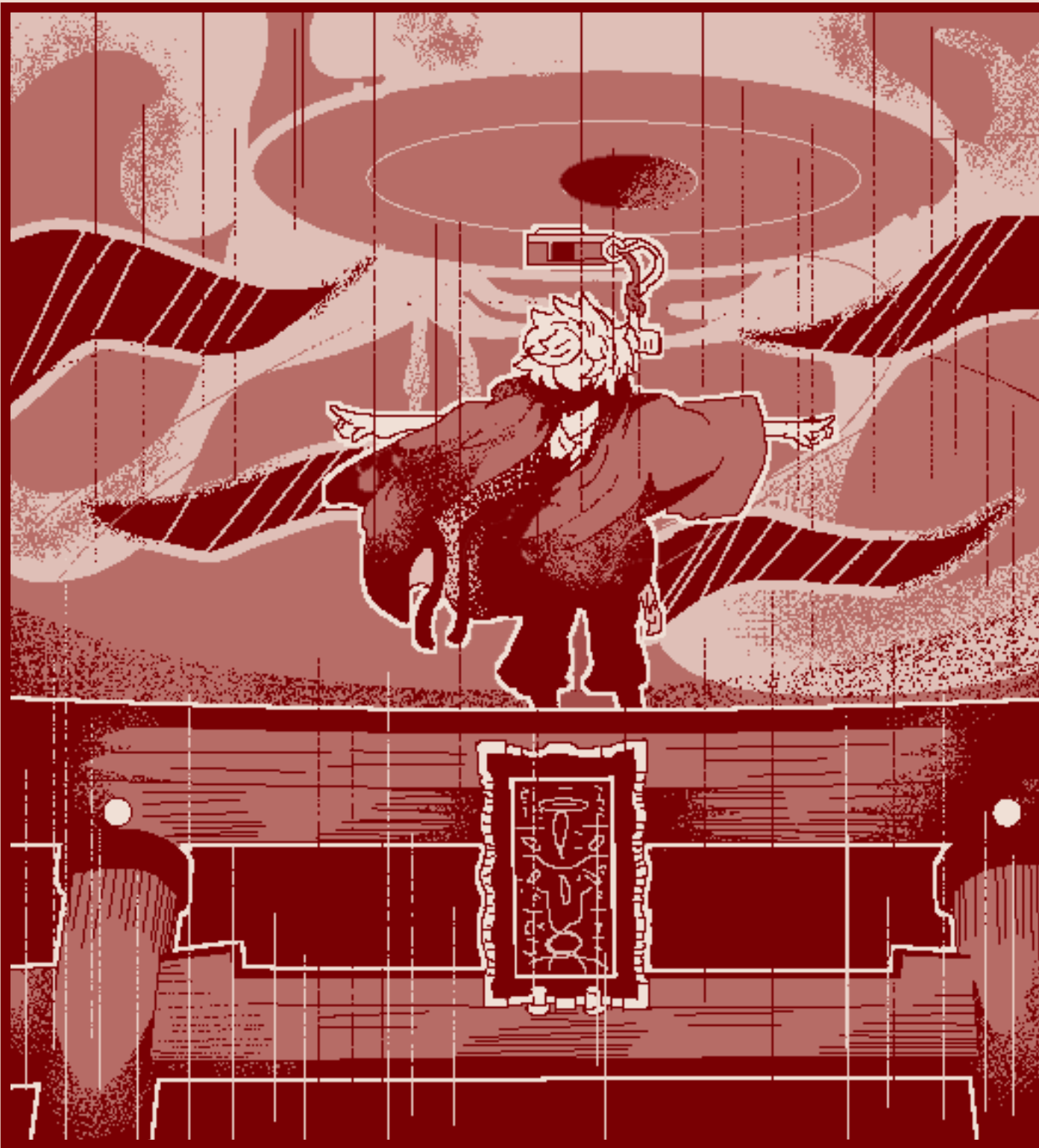
雨が案山子達の涙のようにその勢いを増していく。

「…」





生者に、死者へかけれる言葉はなかった。  
ただ、月彦は左手のデジヴァイスを強く握る事しかできなかった。  
「案山子…あなた達の心、確かに受け取った。  
あなた達を成したのは確かに人の業。  
せめて…」



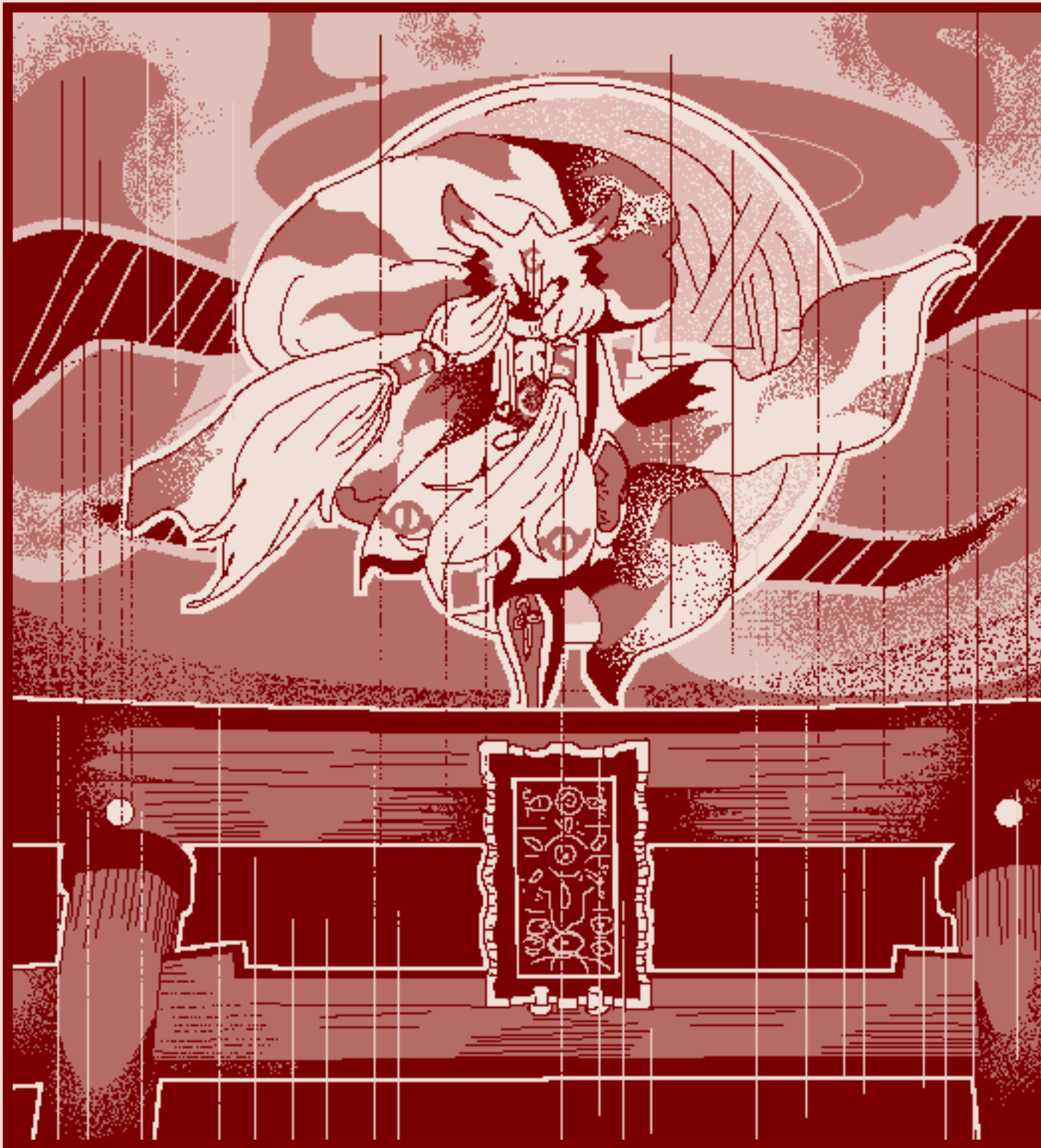
「静かなる闇夜を照らす銀の灯火よ。」

月彦がゆっくりとデジヴァイスを天に仰ぎ構える。

「星の囁きに応え、」

腕を広げ、案山子達の声に応えるように叫ぶ。

「今!!!力を!!!…解き!放つ!!!」



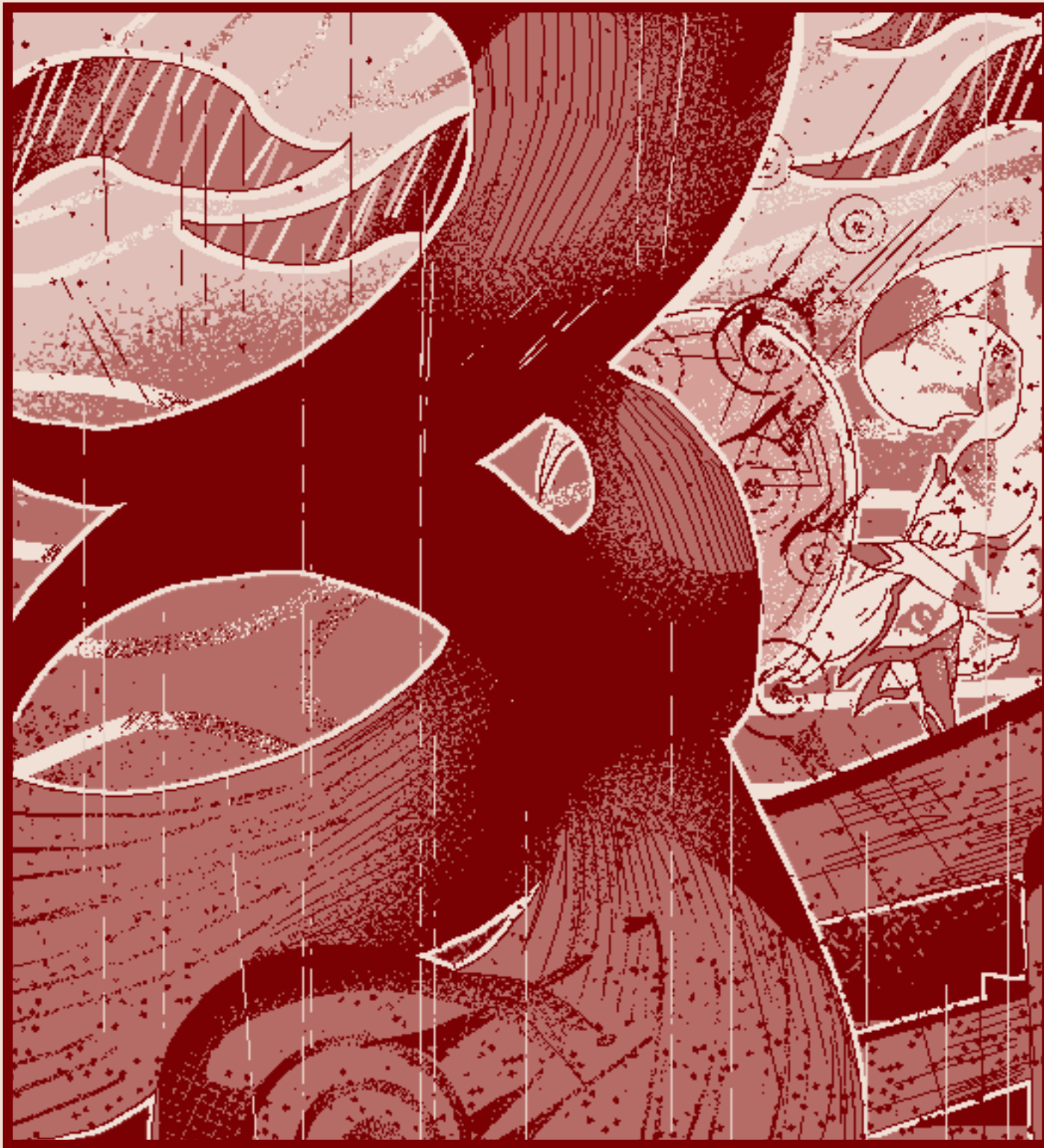
「静かなる闇夜を照らす銀の灯火よ。」

月彦がゆっくりとデジヴァイスを天に仰ぎ構える。

「星の囁きに応え、」

腕を広げ、案山子達の声に応えるように叫ぶ。

「今!!!力を!!!…解き!放つ!!!」



オロチモンがゲッコウガルルモンに気づき、肢体を伸ばし襲い掛かって来る。  
ゲッコウガルルモンが静かに左手を構える。  
背負った月が砕け、ゲッコウガルルモンの前で再形成され回転を始める。  
回転した月は襲い掛かるオロチモンを弾き飛ばす。





ゲッコウガルルモンが鳥居から一歩踏み出すと、羽衣のように浮き一気に加速し、オロチモンへ向かって行く。

それぞれの肢体が更に速度を上げゲッコウガルルモンへ突っ込んで行く。

ゲッコウガルルモンがそれを視界に入れると月は幾つにも分かれ、オロチモンの攻撃を弾いていく。



「アレが…究極体…てうおまたかいいい!???」

ゲッコウガルルモンを見ていた小都華はその後ろの再度来た津波を見つけて再び叫びながら走り出した。

「うおおおおおおおおお!!!! マジかあああ!!!!!???」

「小都華さん。小都華さん。」

「ってうお!? 月彦!? なんでここおるんや!?」

「えっ酷くないですか?」

「あっいや、ちゃうんねん。」

「なんか、あんな大見え切っていなくなりはったから…なんかこう…ガって融合したんかと…こんなひょっこり出てくると言うわけないやろ! ナメとんか!!!」

「いや、位置が変わっただけで…、まあ確かにまあ…。」

「それよりあの津波や! 今度巻き込まれたらどうなるんや!? 今度こそオジャンちゃうか!? 喋くっとらんで死ぬ気が走りや!!」

「それですって! 小都華さん! 神札で足場作れば!!!」

「それや!!!! 君天才か!!!! ってうおおおおおおお!?!!!!???」



小都華が月彦を指さすために振り向いたら今まで以上の絶叫を上げた。

「なんですか!？」

「見てみ!!! アレ見てみ!!!」

「…!!!」

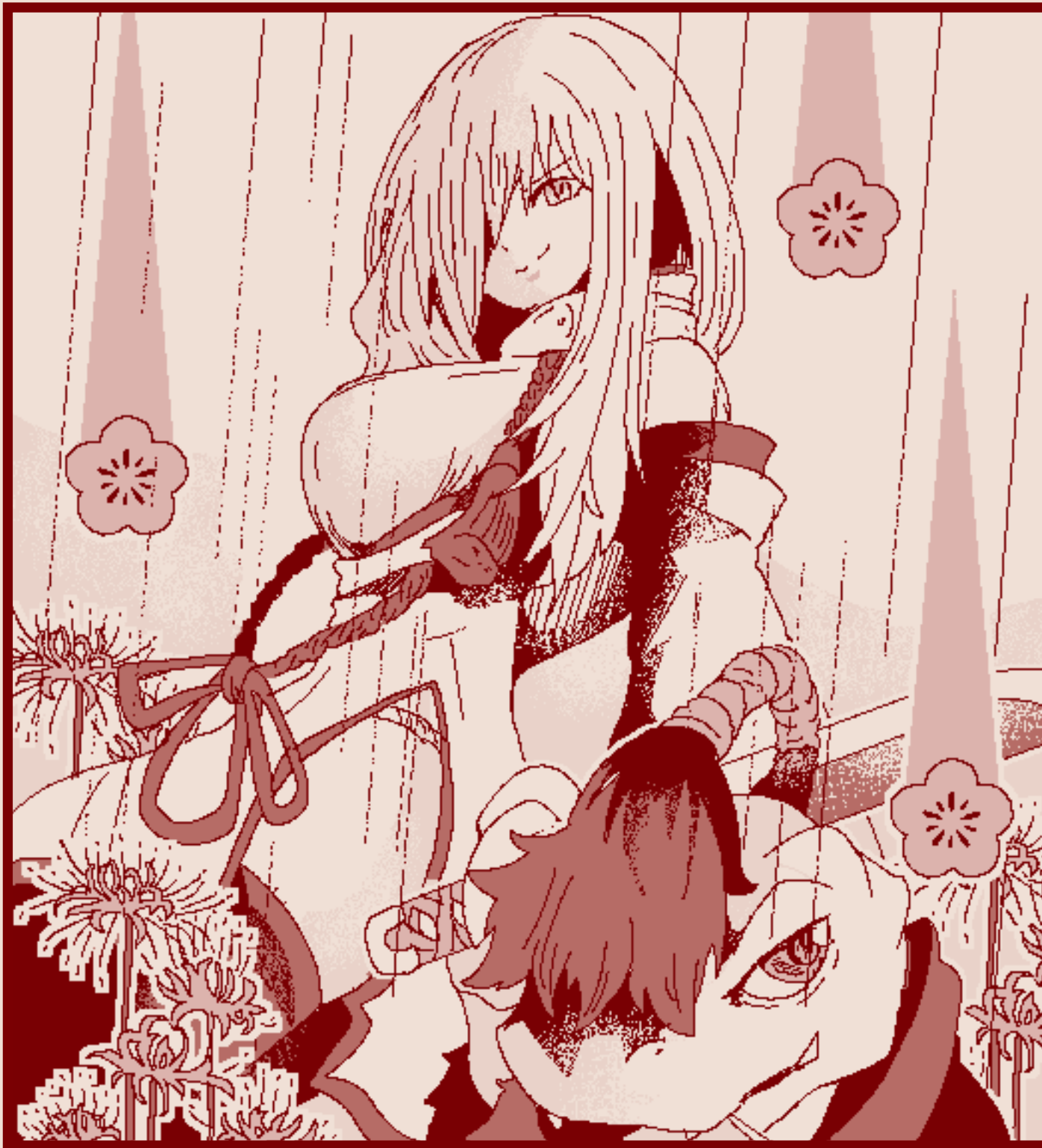
「反応薄いな君!!!」

そこには、小都華達に迫っている 5m 程の津波ではない、村を取り囲む山より巨大な津波が迫っていた。

「不味い…、今迫ってる津波なら田園が埋まるくらいだけど、アレは村全体が…。」

「…っ。」





「お困りのようじゃあないか。」

「伽夜子さん!!!」

勢いよく空から降って来たのは伽夜子とブシアグモンであった。

「無理して、超特急で来たぜ月彦ちゃん!小都華ちゃん!」

「外の方達は…!」

「安心しな、完璧な結界で全員分に警察に配布させたさ。」

「ついでに、坊さん達も助けて来たぜ!」

「あの津波だね…まかせな!」





「いくよブシアグモン殿！」

「おうよ、おっちゃん今回出番少ないし張り切っちゃうぜ！」

「大地を裂く火炎よ、焦熱に煌めく赤き奔流よ！

竜の血脈と共鳴し、灼熱の律動を奏でよ！

完全体！ヴォルケニックグレイモン!!!」

進化したヴォルケニックグレイモンは大剣を地面に突き刺し、左手の炎をの腕を大きく掲げる。

「炎陽火輪!!!!!!」

大きく肥大化した球体上の炎を遠くの巨大な津波に放つ、一瞬大きく輝いたと思ったら、津波が一気に蒸発して、その勢いを失くしていく。

「油断しない!こっちの津波は来るよ!!!」

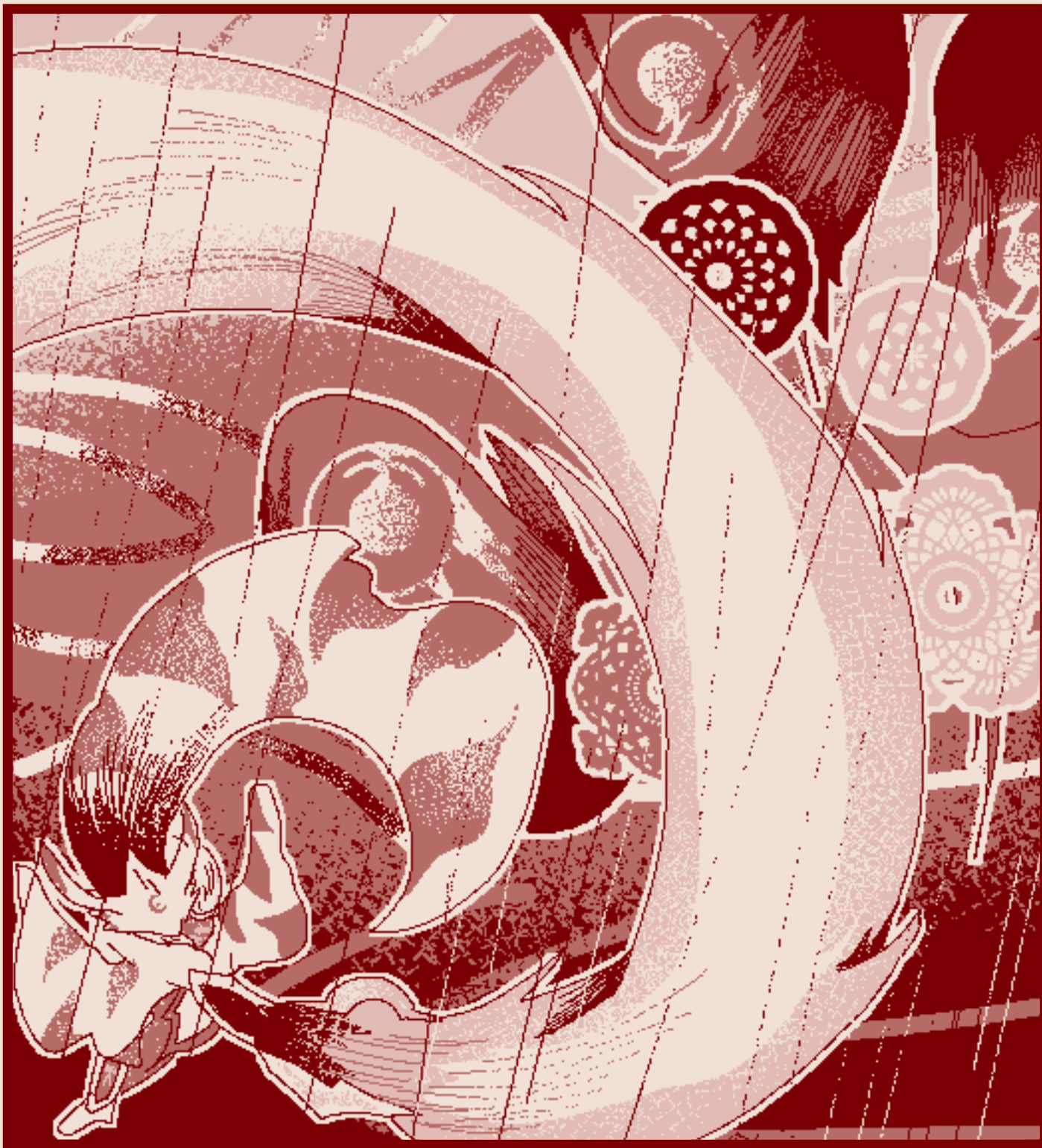
そういうと伽夜子は神札を取り出し足場を作っていく。

「伽夜子ちゃん!来たぜ!第2波だ!!」

再び、山を飲み込む程の津波が現れる。

「こっちに集中する!君達は大蛇を!!!」

「「はい!!!」」



ゲッコウガルルモンがオロチモンの首を3本落とす。  
しかし、オロチモンは怯まず他の肢体を伸ばし攻撃を続ける。  
3本の首が田園に溜まった水に音を立てて落下する。

「嘘やろ!?アレで怯みもせえへんのか!？」

「力の流れを見るに本体は、中心の首だけだ!!!

後は蛸の足程度だ!」

「月彦、アレ見てみい!」

小都華が指した先には、落とした筈の首が水面を切ってゲッコウガルルモンへ向かっていた。

「なんちゅう、しぶとさや…。」

(ゲッコウガルルモンは押しているが、今の大蛇で手一杯か…!)





「ゲッコウガルルモン!!!!」

「…! 月彦!!!」

ゲッコウガルルモンが月彦の呼びかけで、背後から迫っている落とした首に気付く。

月を分割し、それを月彦の方へ飛ばす。

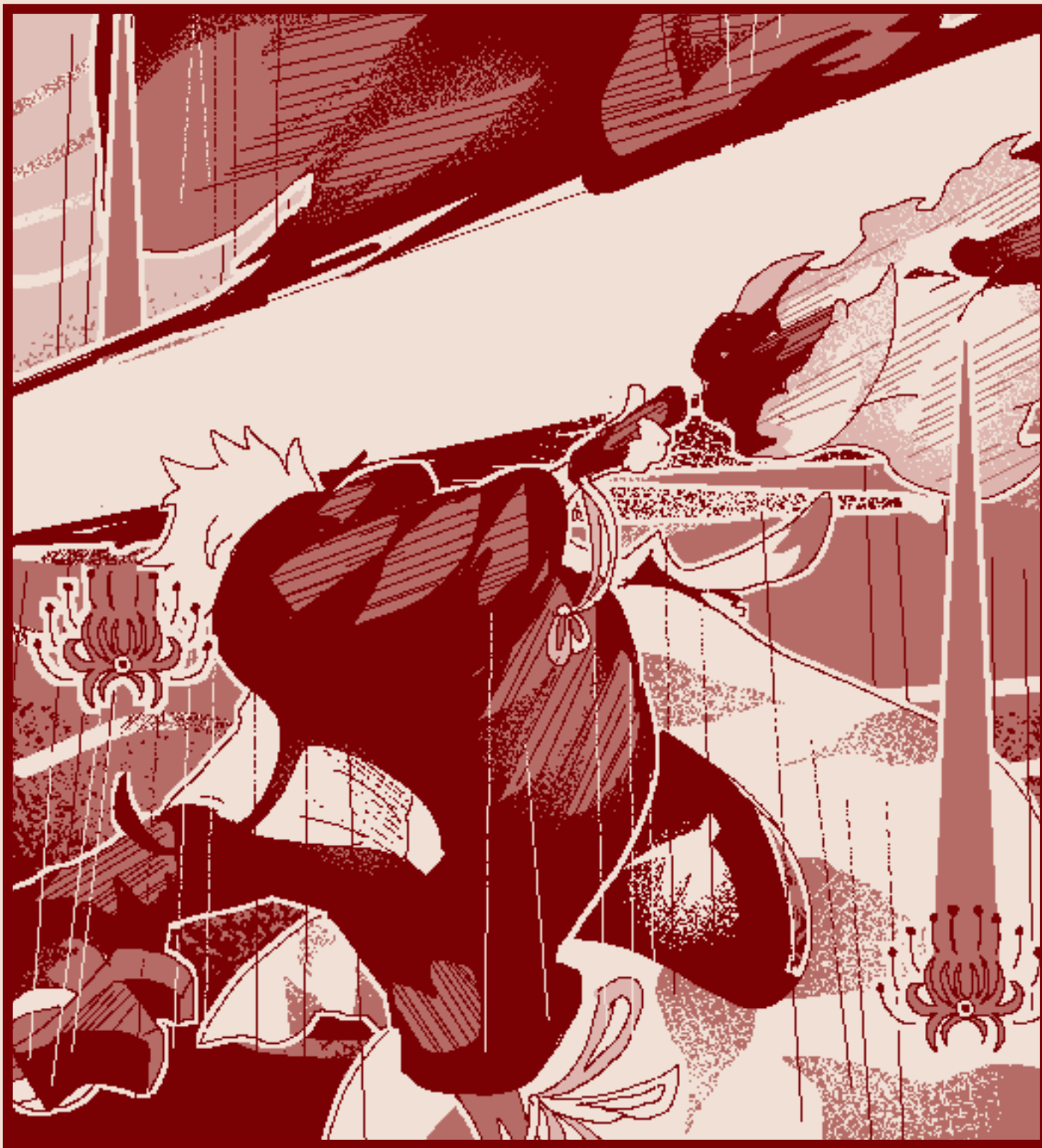
「小都華さん! 落ちた首を完全に殺します! 足場を作ってください!」

「! …ええい分かった!!! まかせとき!!!」

月彦がゲッコウガルルモンへ向かう首と並走するように神札を足場に駆け上がっていく。

月彦に向かった分割した月を鉈で打ち鳴らす。

飛び散った火花が大きな炎となり剣の形に変わっていく。



ゲッコウガルルモンが他の頭を弾き、中心の本体へ一撃を入れられる瞬間が出来た。

「僕を信じろ!!! ゲッコウガルルモン!!!」

その言葉にゲッコウガルルモンが中心の本体へ分割した月を組み立てた剣で真っ直ぐに向かって行く。

目の前にゲッコウガルルモンを突き落とそうと現れた首を月彦が背後から切り伏せる。「今だ!!!」

ゲッコウガルルモンの突きが本体に直撃する。

「!!!!!!」

鳴き声とも及びつかない振動の様な鳴き声が辺り一面に鳴り響く。





ダメージに慄いたオロチモンは逃げ出そうと田園に広がる水面に逃れようとする。  
「不味い!!!」

「逃がすな!!!!月彦君!!!そいつは人の味を覚えた!!!また人を襲うぞ!!!!」

オロチモンが逃げる時に発した衝撃でゲッコウガルルモンと月彦は態勢を崩し、  
初動が一瞬遅れてしまっていた。

「!」

オロチモンが逃げようとする水面を勢いよく何者かが絶ち割った。  
「最後の最後で見せ場ないっちゃあ、せっかくの筋肉が泣くんでね!!!」

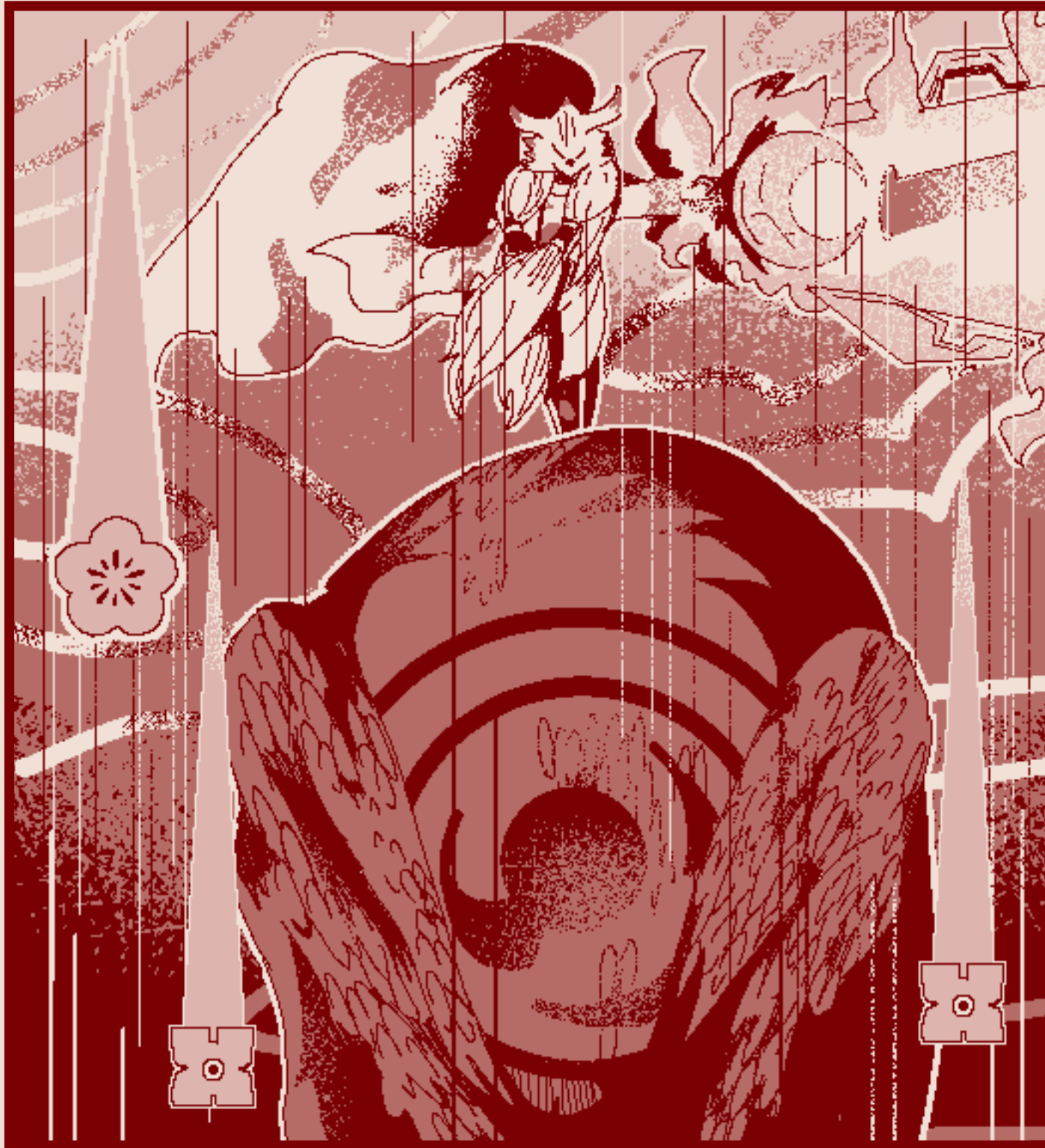
そこには、小都華を抱えたボロボロのエンジェウーモンがいた。

「小都華!いくよ!!!!」

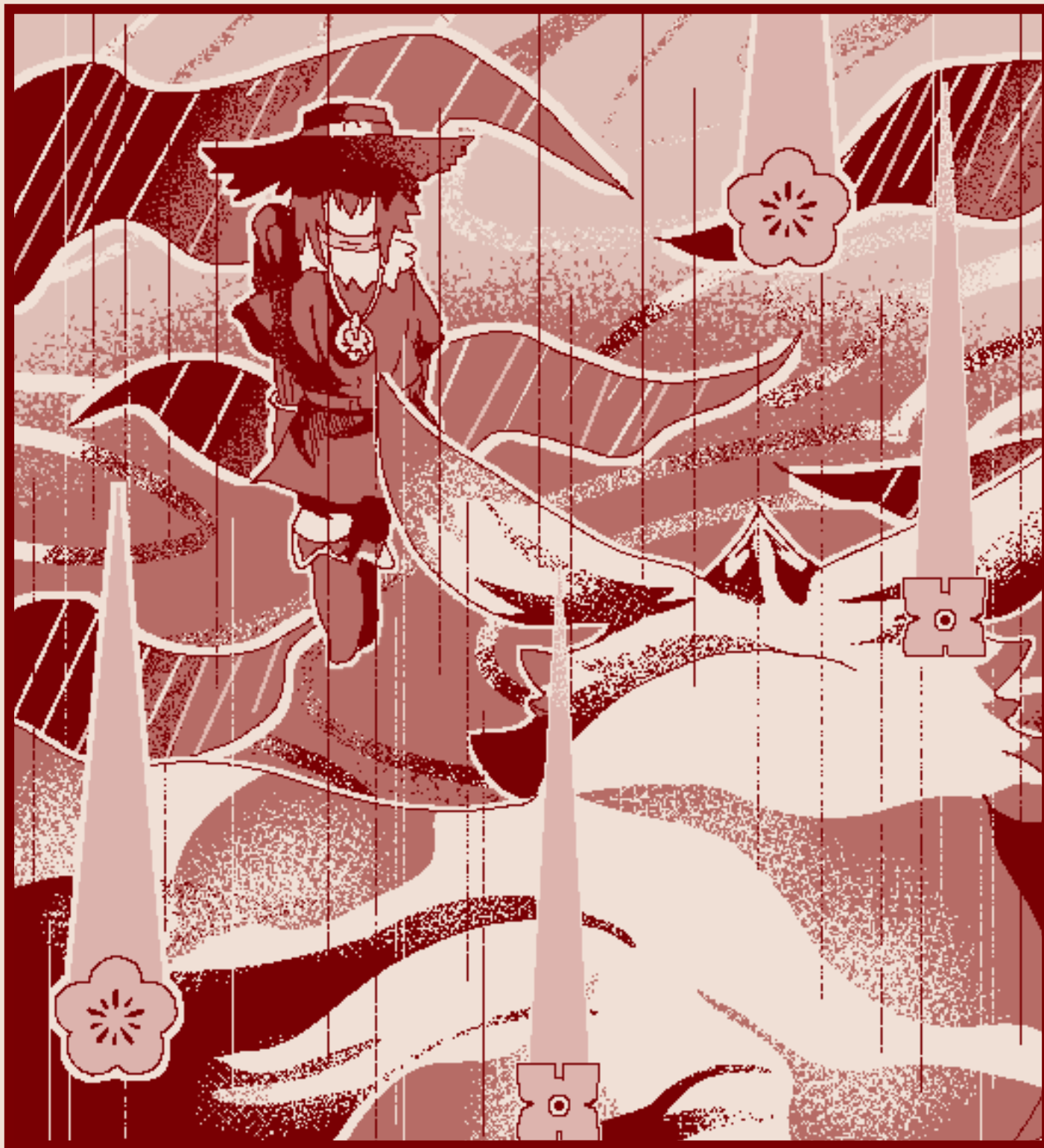
「おうよ!!!!」

「これがウチらの!/アタシらの!『ホーリーアロー』だあああああああああ  
あ!!!!!!」

勢いよく放たれた左アッパーがオロチモンを再びゲッコウガルルモンの元へ吹き  
飛ばす。



そこには左手に巨大な剣を持ったゲッコウガルルモンが構えていた。  
「大蛇よ、お前を斬り清める。」



「案山子よ…この世、縁に囚われるな…許せ!!!」



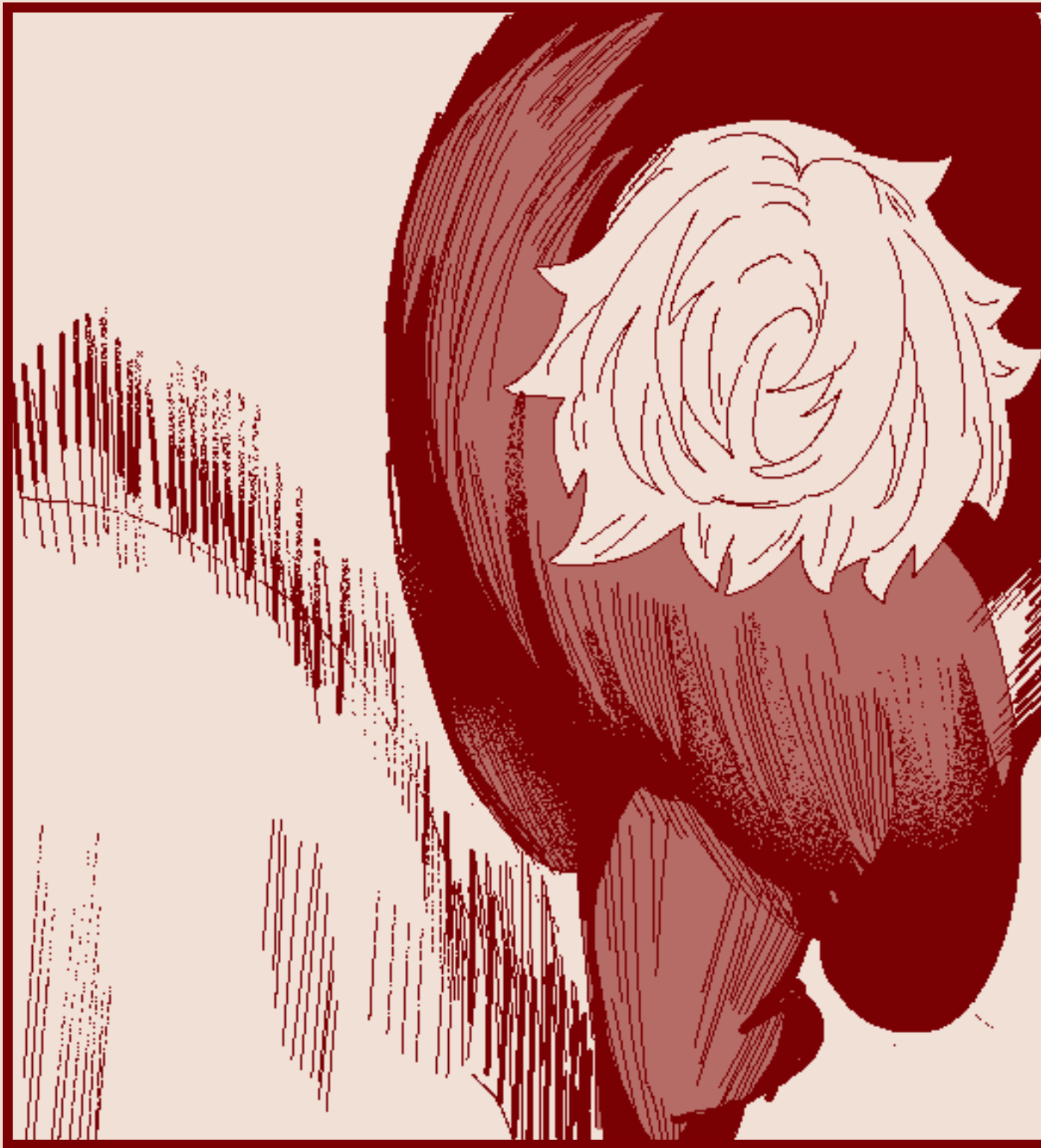


ゲッコウガールモンが振り上げた剣がオロチモンを切り裂く。





砕けたオロチモンの肢体が華のように炸裂し、鮮やかに散っていった。  
マンゲツガルルモンが静かに田園に降り立つとそこは、幽世ではなく美しい緑の  
稲が揺れていた。



「私の…私の村が…私が築き上げたものが…」

田園の真ん中で大国が散ったオロチモンの華を今にも泣き崩れそうな顔で見ている。

「あの…ジジイまだ!!!」

身勝手な理由で未練がましく縋りつく大国の姿に怒髪天が来た小都華がにじり寄ろうとした瞬間、月彦が大国の顔面を殴りつけた。

余りにも、らしからぬ行動に小都華は呆気にとられてしまった。

「な…! おま…な!! 私を…誰だと!!」

私が…我々がいたからこの村は、発展をしてきた!!!!

私がいなくなってみろ!!!! この村も!!!!

いや!!!! 私はミシャクジ様の力でこの国自体に大いに貢献してきた!!!!!!

その私を!!!! ええい!!!! 多少の犠牲がなんだ!!!! どうせ社会に対して貢献できないガキに老人ばかりだ!!!! それで多くの人間が利益を享受できてるんだ!!!! それが!!!! それがこの世界だ!!!! 私は!!!! 私はその汚れ仕事を担ってやったのに!!!! その私を!!!! 貴様ごときが!!!!」

「…大国さんもドジですね。

コケるなんて…」

月彦は淡々と続ける。

「あなたを警察に突き出します。

あなたは、ミシャクジ信仰の…幽世の神主じゃない…。

あんたは!!!! 自分の利益と尊大な自尊心を満たす為に大勢の人間を犠牲にした最低の殺人犯だ!!!!

常世の人の手で、裁かれるんだ。」

「そもそもお前らごときでどうにか出来るとでも!?

私には幾らでも手を回せる人間が! 「おっと。」

伽夜子が笑みを浮かべいつもの飄々とした態度で近寄って来る。

笑みは浮かべているがその目は笑っていなかった。

「…実はね。

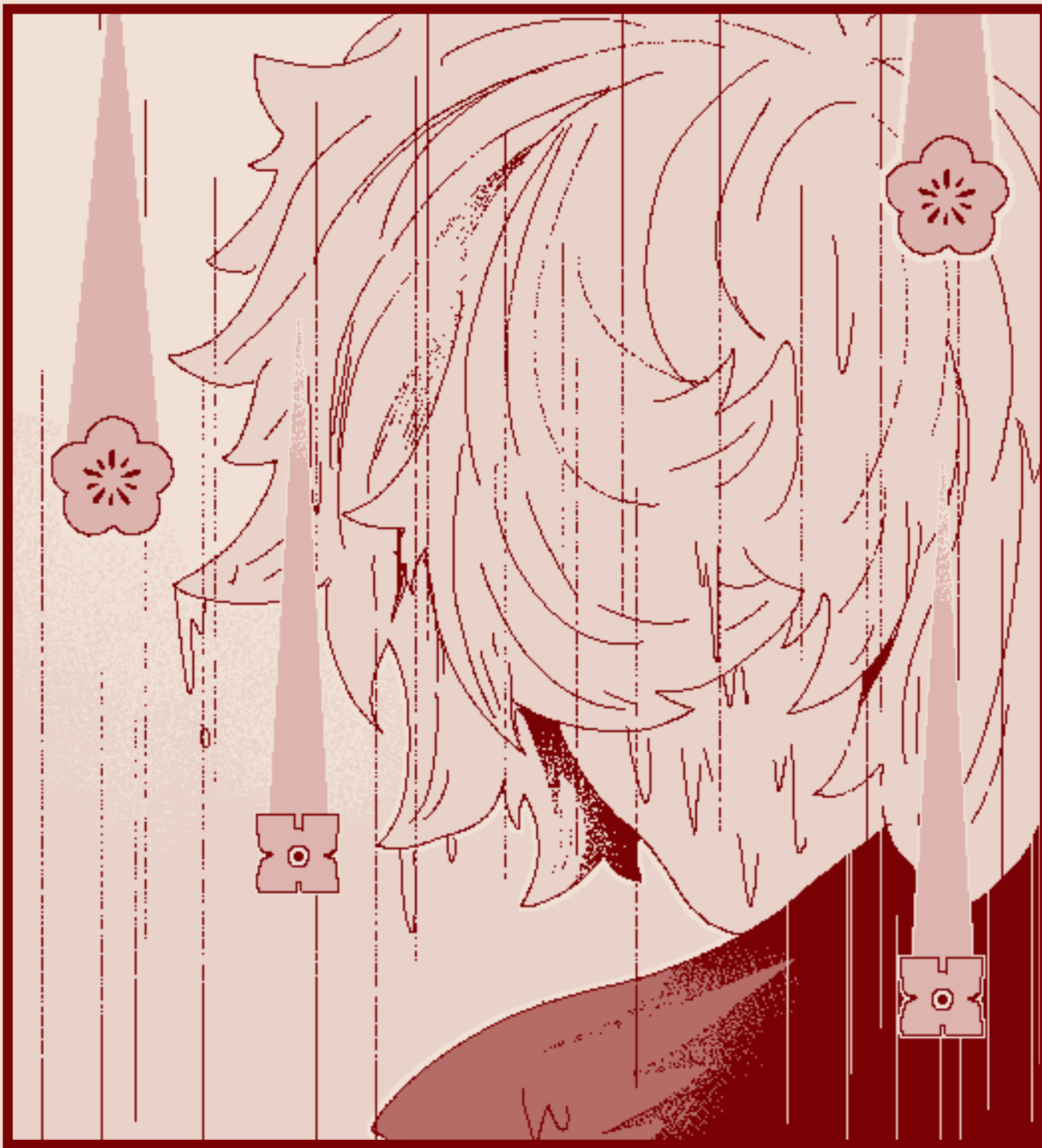
ここに寄る時に狐目の胡散臭い男に、色々な書面、動画、音声データを貰ってね。

それに、今あなたの屋敷から逃げてきたって言う小女の関係で警察が、あなたにお話を聞きたいみたいです?

あっ、そうそう、ついでに資産ごっそり盗まれてるみたいだけどいい友達を持ったみたいだね。」

「れ…蓮華院…!!!!」

大国も観念したようで力なく項垂れた。



連行されていく大国を見送った後、小都華が静かに月彦に声を掛けた。  
「正直…君が殴るなんて意外やね…。」  
「…そうですね、人の手で裁くなら、僕が手を上げる事はあってはいけないと思います。  
それは、法の役目です。  
でも…。」  
「でも？」  
「誰かが…小都華さんが泣いてあげたように…せめて、誰かが怒ってあげなきゃ  
と思ったんです。」  
「…。」  
月彦は雨の中振り向かず答えた。  
その時だけは、決して振り向こうとはしなかった。



『…前線を伴った発達中の低気圧が北海道付近にあって、北東へ進んでいます。低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込み、西日本から北日本では大気の状態が非常に不安定となっており、雷を伴い激しい雨の降っている所がありま…。』

事件が終わり、警察からの聴取も終わった小都華達は日常へと戻っていた。「日瞬さんから聞いた話だと今、蛇穴村は蜂の巣を突ついたような状況だそうです。社からは、大量の死体、伽夜子さんは、最低限の被害で済んだと言ってましたが、それでも大蛇に喰われて命を失くした方や精神に変調をきたした方は、数十名はいるそうです。」

大国の件も電腦犯罪捜査課の担当する分野も含めれば判決は気の遠くなる程、先になりそうだそうです。」

「墓に手合すのは、当分先やな。」

「ええ、蓮華院も追わないと。」

ただ、それでも…あの場でどさくさに紛れて殺して、幽世の事だって言い訳を与えないで、自分のやった事を公の場で突きつける事が出来るだけ、ずっとマシだと思っています。」

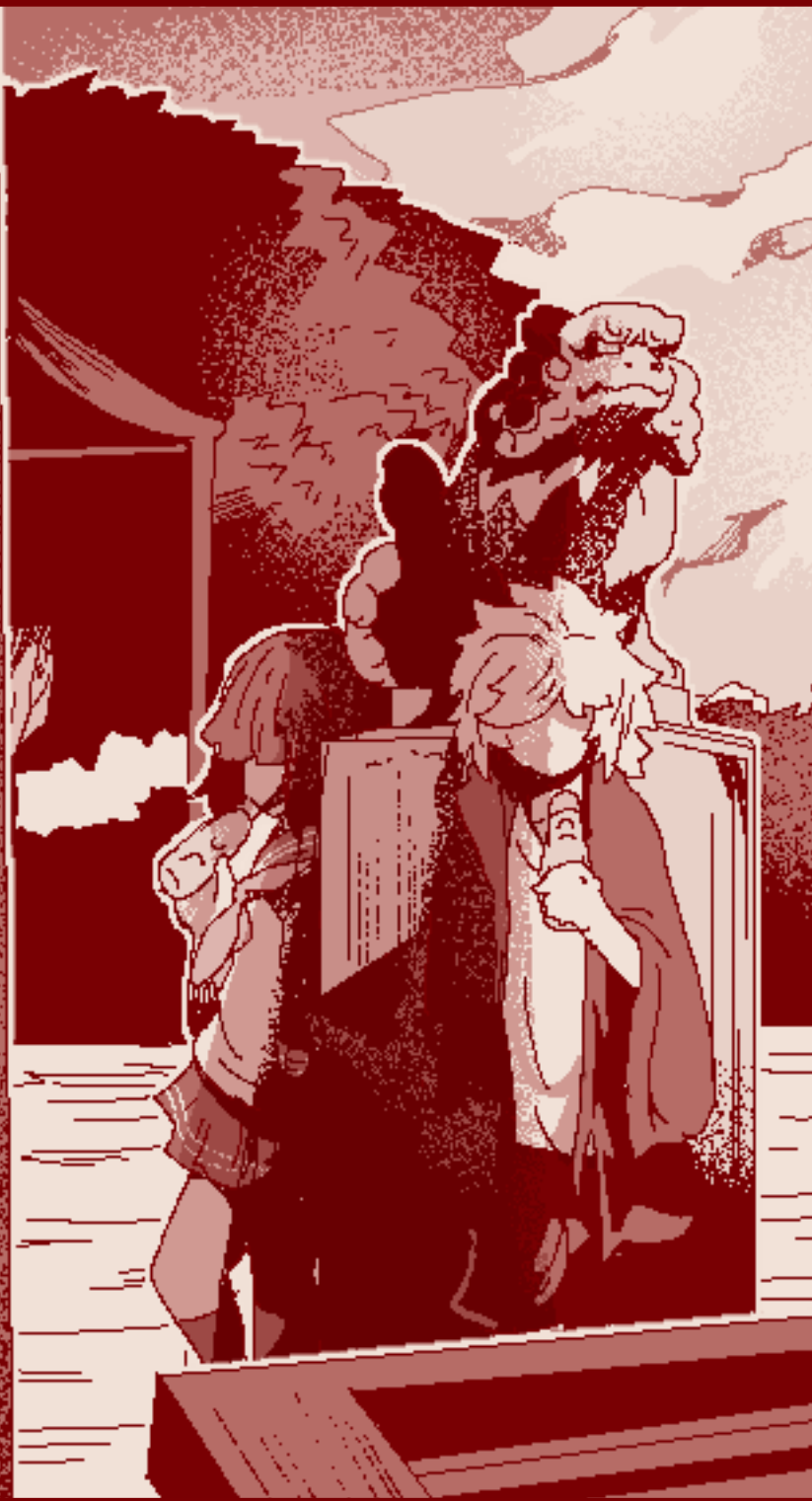
「…。」

「その、ありがとうございます。」

「?ん?どうしたんや急に?」

「あの時、小都華さんがいなかったら、あの子達の為に泣いてくれたから、僕は…留まる事が出来た。」

「…そっか。」







「そういえば、今日制服なんですね。」

「ん？ああ、受験勉強や、夏休みやけど学校で補習やっててな。」

「…そうですか。」

「あれから色々考えてな。」

そう言うとき都華は御守りと藁を取り出した。

「それ…。」

「持ってようと思ってな。」

あの時、ウチはあの子に何も声を掛けてやる事できなかった。

多分、今もそうやと思う。」

「…。」

「せめてな、アレ見たんなら、生きれなかったあの子らの分くらいと思ってな。」

「…小都華さんが背負う事なんてないですよ。」

「月彦…覚えとっか？役場行った時、見せてもらった蛇と子の置き物。」

「ええ…。」

「きっと、アレ作ったひとも忘れんようにと思って作ったんとかうんかな。」

あの子達の供養もあるんやろうけど、自分が一体、何の上に生きてるかって。

…大国のジジイはきっと忘れてしまったんやと思う。」



「なあ、月彦。」

「あんたと伽夜子さん結構いいとこの高校行っとるんやろ？昼喰った後、勉強教えてな。」

「…いいですけど。」

振り向いた小都華の顔は…、

「ウチにはあの子達が手を伸ばせなかった未来に手が伸ばせる。」

背負う訳やない、ただ…上手く言えんけど、ウチはあの子らの分も欲張って手伸ばしたくなったんや。

…ウチがそうしたいんや。」

そう言って振り向く小都華の笑顔は夏の日差しのように眩しかった。

そう、月彦には思えた。

「…今日の昼は、素麺と天ぷらですけど食べていきます？」

「お、ええな！ご相伴に預かるわ!!」

勝手な事と分かっている。

だが、月彦にはこの笑顔で何かが少し報われたのではないかと思いたかった。